日本語資料を対象としたコーパスの構築

文学研究科・国文学中国文学専攻
准教授　市村 太郎

キーワード：　コーパス、日本語史、日本語学

【研究概要】

コーパスとは、言語研究を目的とした言語資料の電子データベースです。言語の研究や辞典の編纂、言語教育など、言語に関わる諸分野において、用例の収集や集計は欠かすことのできません。調査の都度直接文献に当たって用例を集めるのが理想的ですが、効率的ではなく、その文献がいつでも利用できるとは限りません。また、人の手で行えば写し誤ることなども度々あります。文献を電子化してコンピュータ上で検索可能にし、目的に応じて、例えば会話文かどうか、会話文なら話し手は誰か、その語の品詞や活用形は何か、といった情報を付加することで、大量の用例を効率的に処理できるようにするのがコーパス作成の目的です。

近年、言語に関わる各分野で、目的に応じたさまざまなコーパスの構築が進められています。図に挙げたのは、本居宣長が『古今和歌集』を近世上方語訳した『古今集遠鏡』という資料と、そのコーパスの例です。古今集の本文と宣長の訳などをマークアップし分けています。

【期待される効果・応用分野】

- 言語資料の記録と電子化による調査・研究への効果的利用
- 国語辞典の作成・言語教育・国語教育等における例文の取得や作成
- インターネットを介した時間・場所を問わない日本語文献資料の活用

【アピールポイント】

歴史的資料や方言談話の文字化資料をはじめ、新聞や雑誌、日常会話など、さまざまな資料のことばのアーカイブが考えられます。

【関連情報】

論文：市村太郎「近世口語資料のコーパス化―狂言・洒落本のコーパス化の過程と課題―」『日本語学』（臨時増刊号・特集「日本語史研究と歴史コーパス」） 33(14) 96-109 2014年11月

リサーチマップ：https://researchmap.jp/tichimura

研究室URL　　：https://sites.google.com/view/ichimurat/

平安後期文芸における人的交流の研究

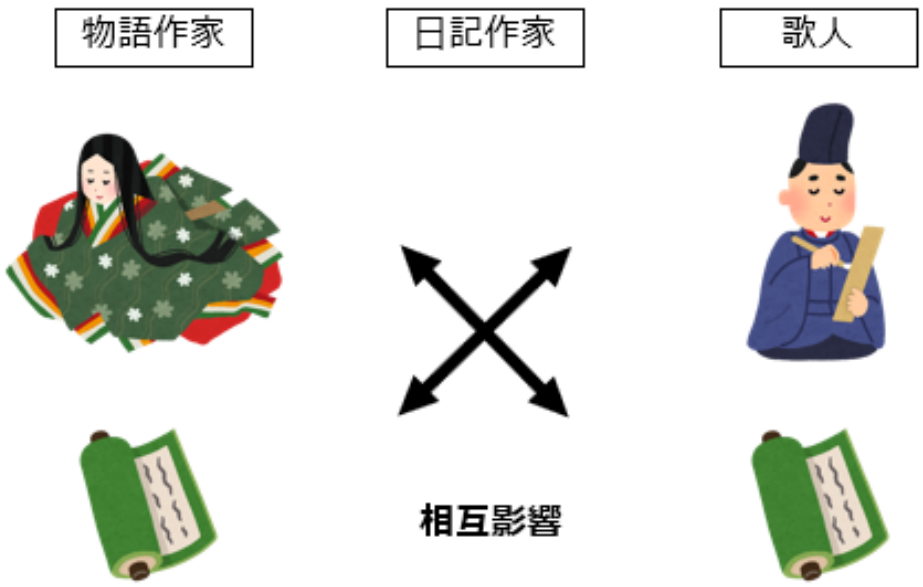
文学研究科・国文学中国文学専攻
准教授　大塚 誠也

キーワード：　平安時代文学・日記文学・和歌活動

【研究概要】

平安時代の文学について、作品と作者、それらの相互関係について研究しています。例えば紫式部と『源氏物語』が次世代以降の文芸活動にどのような影響を与えたかという問いや、各世代の歌人たちがいかに交流していたかという問いなどを究明しています。

学校教育は清少納言や紫式部、『百人一首』の歌人など有名どころを中心に扱いますが、実際には文芸に携わった者達がその何十倍も記録に残っています。政治背景や文化潮流を踏まえた上で彼らの活動を構造的に究明することが私の研究目標です。



【期待される効果・応用分野】

大河ドラマ『光る君へ』の放映に合わせた市民講座や講演
県立文学館の企画展への協力、寄稿

【アピールポイント】

教育業界や出版業界、文化事業と親和性が高い分野です。

【関連情報】

リサーチマップ　https://researchmap.jp/otsukase

連歌文学の研究

文学研究科・国文学中国文学専攻
教授　竹島 一希

キーワード：　連歌、宗祇、肖柏、宗長、紹巴

【研究概要】

連歌という文学の研究を行っています。連歌とは、室町時代に隆盛した古典文学の形式です。和歌でいう上句と下句を交互に続けて詠み進めます。和歌と異なる点は、連歌は複数人で行うことです。しかも、式目と呼ばれるルールもあり、連歌は言語ゲームであるといえます。
連歌には、それまでに成立していた古典文学、『古今和歌集』や『新古今和歌集』のような和歌、『伊勢物語』『源氏物語』のような物語、そして杜甫や蘇東坡などの漢詩を利用して、作品を作ってゆきます。そのため、連歌に携わる人は、幅広く色々な勉強を行いました。
現代における連歌の読解も、様々な資料を駆使しながら行っています。特に近年、種々のデータベースが整備されつつあり、連歌の面白さ、また逆に難しさを、より高精細に理解できるようになってきました。

【期待される効果・応用分野】

日本・中国文化学科では、京都府立京都学・歴彩館と協同で、京都新聞に古典籍紹介の連載をもっています。歴彩館所蔵の資料を、様々な観点から紹介する連載で、令和7年度は、「タイムトリップきょうと」と題して、江戸時代の名所案内記を紹介しています。学科の公式ウェブサイトに一部転載されていますので、御覧ください。https://sites.google.com/view/jclit

【アピールポイント】

文系で産学連携、まして古典文学分野での産学連携というのは、にわかには具体的に思い浮かびませんが、何か思ってもみないところで可能であるかもしれません。

【関連情報】

論文等：

- 「宗砌における漢詩文摂取」（『日本文学研究ジャーナル』第23)号、pp.9-23、2022年9月）
- 「関東における心敬の位置―『故事本語本説連歌聞書』考（承前）―」（『国語国文学研究（熊本大学）』第51号、pp.1-14、2019年3月）
- 「故事と連歌と講釈と―『故事本語本説連歌聞書』」（『アジア遊学（日本人と中国故事―変奏する知　の世界―）』第223号、pp.116-127、2018年9月）など

リサーチマップ　https://researchmap.jp/Kazuki.T

平安時代から鎌倉時代にかけての日本漢文学、およびその作り手である儒者貴族の研究

文学研究科・国文学中国文学専攻
教授　仁木 夏実

キーワード：　和漢比較文学、儒者、「和漢兼作集」

【研究概要】

西洋の文化が奔流となって日本に流れ込んできた近代にいたるまで、日本の文化・文学は主に中国の文化・文学の強い影響下にありました。特に中国の書物は頻繁に日本に持ち込まれ、人々の教養の源となりました。平安時代の文学というと、「伊勢物語」、「源氏物語」のような物語や、「古今和歌集」、「百人一首」のような和歌など、仮名（ひらがな）によって書かれた和文を思い浮かべられる人が多いと思いますが、実はそれらにも中国文学の強い影響が見られます。

また、そうした仮名文学が生まれた一方、主に男性貴族の手によって漢字による文学（漢文・漢詩）が作られ、愛好されていました。私はそうした日本人による漢詩文の中でも、平安時代後期から鎌倉時代にかけて制作された作品について研究しています。作品の解釈を行うだけでなく、どのような人物によって作られたのか、作者の伝記的研究も行うことにより、当時の漢詩文作品制作の歴史的位置づけを明らかにしてゆきたいと考えています。

近年主に取り組んでいるのは「和漢兼作集」という詩歌集の研究です。鎌倉時代中期に編纂された、和＝和歌と漢＝漢詩をともに作ることが出来た作者たちの作品（漢詩は二句一聯のみ）を四季等のテーマごとに配列したもので、編纂された当時の、漢詩と和歌を並べて鑑賞するという嗜好から生まれた書と考えられると同時に、当時の人々がどのように平安時代の漢詩を評価していたのかを示してくれている書ではないかと考えています。

【期待される効果・応用分野】

研究概要でも述べた通り、日本の古典文学というと仮名で書かれた和文が代表であり、それらは非常に日本的なものとされることが多いのですが、それは当時の文学や人々の感覚に完全に即したものとは言えません。特に平安時代の貴族社会における公的な文学は漢詩文であり、和文にも中国文化の影響が多く見受けられます。平安・鎌倉時代の日本人による漢詩文を研究することは、当時の人々が言葉や文学をどのように考えていたのか、また、日本の古典文学が漢字・漢文を共有する中国や朝鮮半島の文学とどのように関係しているのか、大きな視野で考えるきっかけになるはずです。

【関連情報】

リサーチマップ　https://researchmap.jp/read0076515/

中国の宋元明代における歌辞文芸の受容と展開

文学研究科・国文学中国文学専攻
講師　藤田 優子

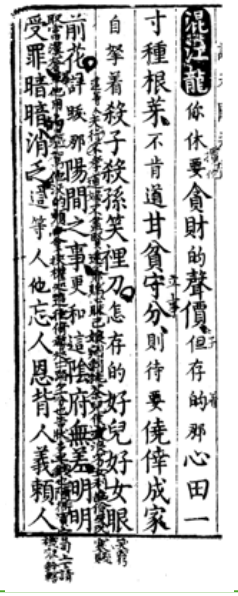
キーワード：詞　北曲　南曲　戯曲　小説　出版

【研究概要】

歌辞文芸とは、決まった旋律に言葉を当てはめて作る韻文文芸の総称である。中国では歴史上、さまざまな種類の歌辞文芸が存在し、旋律にあわせて歌われる歌辞として受容されるのみならず、芝居や講談といった芸能の場においても大きな役割を果たし、多様な人々によって親しまれていた。

本研究は、宋代の詞・元代の北曲・明代の南曲などの歌辞文芸を総体として捉え、それらを使用する芸能、さらには芸能の物語を母体とする戯曲・小説類をも含めた全体像を明らかにしようとするものである。

詞集や曲選、文芸理論類のみならず、各種芸能に由来する戯曲や小説といった通俗文学テキストをも含めた広範な資料の分析を行うことにより、「詞・北曲・南曲」「宋・元・明」といった区分では語ることのできない領域に光を当て、近世期の中国に一つの文化的基盤を形成した歌辞文芸の受容と展開を総体的に描き出すことを目指す。



↑ 伝統芸能の舞台では今も様々な歌が歌われている。

← 明代の戯曲テキストに見える歌辞の部分。行間の書き込みは、元代に刊行されたバージョンとの異同を示す。明清期にはこうした校勘作業も行われていた。

【期待される効果・応用分野】

中国文学、芸能史、出版史など

【アピールポイント】

芸能の担い手や庶民といった、文学史の表舞台には現れにくい人々の存在に着目し、文字資料の中から彼らの営為を見出したいと考えている。

【関連情報】

リサーチマップ　https://researchmap.jp/y_fujita

江戸時代の文学および作者・本屋の出版活動

文学研究科・国文学中国文学専攻
教授　藤原 英城

キーワード：日本近世文学　浮世草子　本屋　出版　挿絵　文学の商品化

【研究概要】

元禄時代の上方（京・大阪）を中心とした浮世草子（小説）作者と本屋（版元）の出版動向について研究をしています。
浮世草子というジャンルは西鶴『好色一代男』の誕生をもって始まりますが、それは文学が娯楽商品として本格的に始動する記念碑的な作品となりました。元禄期には商品の全国的な流通網が整備されますが、上方出来の『好色一代男』は江戸で海賊版が出版されるなど、大ヒット作品となります（図１・上方版〔西鶴画〕『新編西鶴全集第1巻』、図２・江戸版〔菱川師宣画〕国会図書館蔵本）。商品となった文学は、本文はもちろんのこと、挿絵などにも売らんがための工夫を凝らし、作者や版元はライバルの動向を横目に見ながら執筆・出版活動を行うことになります。本研究では浮世草子を中心として、そうした商品化した文学としてのあり方を多角的なアプローチによって考察します。

図１

図２

【期待される効果・応用分野】

文学作品・コンテンツ等のマーケッテング、メディア戦略

【アピールポイント】

文学を商品として考察すること。

【関連情報】

『浮世草子大事典』（笠間書院）、『新編西鶴全集』（勉誠出版）、『八文字屋本全集』（汲古書院）、『西沢一風全集』（同）、『潁原文庫選集』（臨川書店）などを編集。

リサーチマップ　https://researchmap.jp/read0045060

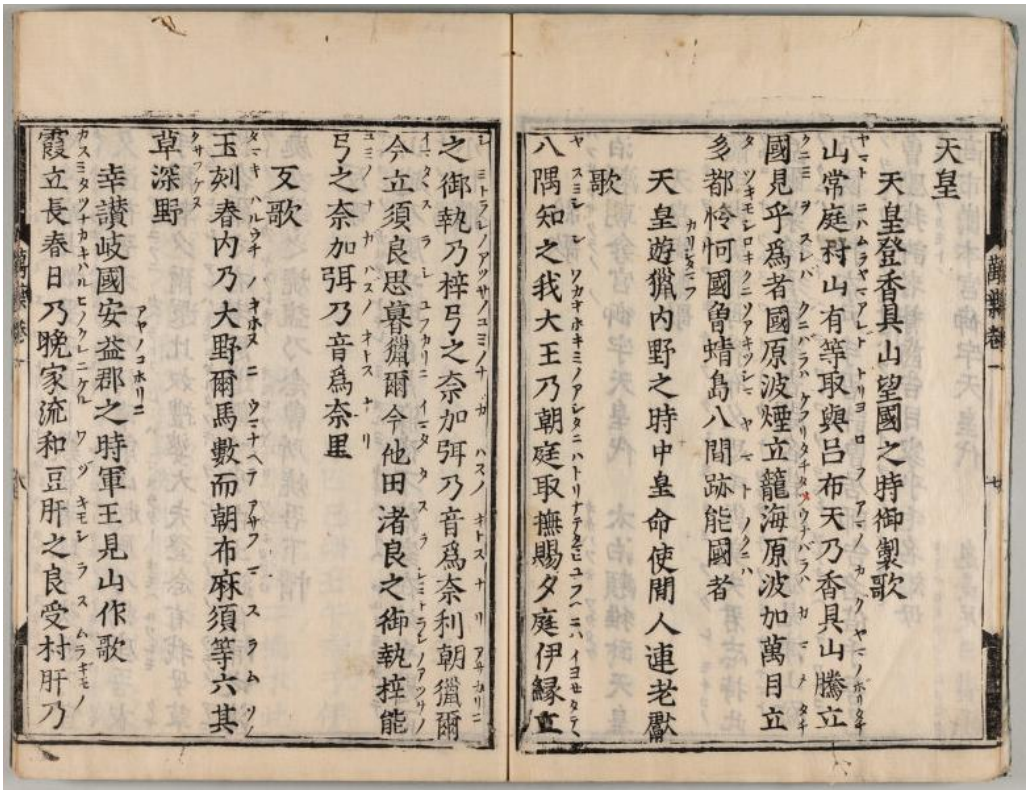
古代日本語の文字・表記の研究

文学研究科・国文学中国文学専攻
講師　吉岡 真由美

キーワード：日本語史、日本語学史、文字・表記

【研究概要】

専門は日本語学です。日本語はどのように書かれてきたのか、という問題に関心があります。とくに万葉仮名に興味があり、文献によってその分布の様相が異なるのはなぜか、ということを考えてきました。万葉仮名の本格的な研究は江戸時代から始まり、本居宣長や平田篤胤といった国学者によってさまざまに繰り広げられました。最近は、そうした国学の成果が、近代以降の万葉仮名研究の常識にどのような影響を与えているのか、という問題にも関心を持っています。



天皇

天皇登香具山望國之時御製歌

山常庭村山有等取與呂布天乃香具山騰立國見乎爲者國原波煙立龍海原波加萬目立多都怜何國曾蜻島八間跡能國者

天皇遊獵内野之時中皇命使間人連老獻歌

八隅知之我大王乃朝庭取撫賜夕庭伊縁立之御執乃梓弓之奈加弭乃音爲奈利朝獵爾今立須良思暮獵爾今他田渚良之御執拵能弓之奈加弭乃音爲奈里

反歌

玉刻春内乃大野爾馬數而朝布麻須等六其草深野

幸讃岐國安益郡之時軍王見山作歌

霞立長春日乃晩家流和豆肝之良受村肝乃

京都府立京都学・歴彩館歴史資料アーカイブより

【期待される効果・応用分野】

上野誠・鉄野昌弘・村田右富実編（2021）『万葉集の基礎知識』KADOKAWA

【関連情報】

リサーチマップ　https://researchmap.jp/myoshioka